

【第3回】

大庭・善行、お隣同士でこんなに違う、地名の特徴

藤沢地名の会 会員 酒井 郁子

1. はじめに

今回のテーマ大庭・善行は、縦長の藤沢市域の中ではほぼ真ん中辺りに位置する。

市の行政区域としては、「湘南大庭地区」と「善行地区」と呼ばれている。

(資料編「資料3：藤沢市域の変化と13地区の区割り」参照)

東西に隣接する2つの地域だが、歴史が大きく異なることが、地名にも表れている。

- 湘南大庭地区：主に 大字 “大庭”

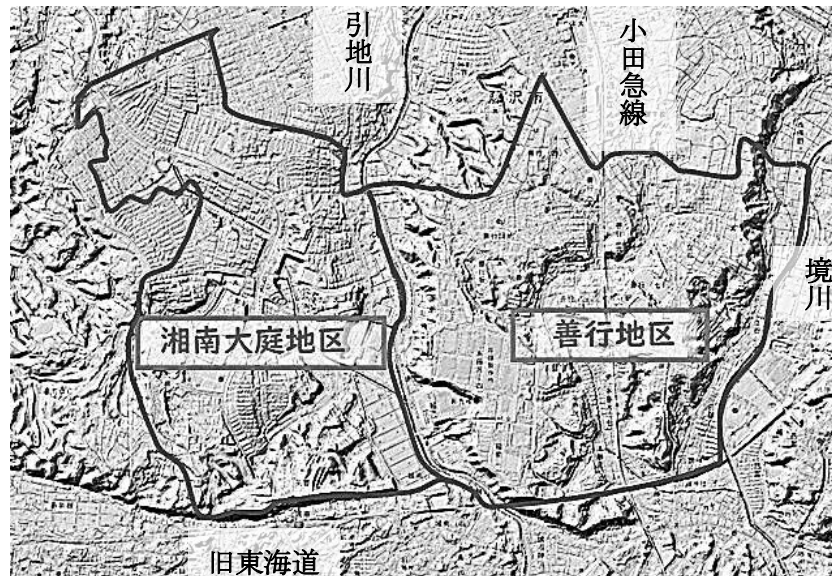
- 善行地区： “善行” という大字はなく、大字 “藤沢” の一部が中心

(資料編「資料1：藤沢市内の大字」参照)

2. 大庭・善行の地勢

二つの地域の地勢の特徴 (図3-1)

- 高台の南端に位置する。
大庭地区は、高座丘陵の南端。
善行地区は、相模野台地の南端。
- 旧東海道(現 藤沢バイパスから新湘南バイパス)を挟んで南側は砂丘地帯に面する。
- 東側の善行地区は、東を境川に面し、中央に境川支流の白旗川が流れる。
- 西側の湘南大庭地区は、地域の東寄りに引地川があり、引地川支流の小糸川が流れる。



※ 行政上の管轄では、二つの地域の境は引地川になっているが、本来は引地川の東岸にも大庭地区の一部がある。

☆地形を表す地名：稲荷台、本入台、南山(城南)、丸山、羽根沢

大庭・善行ともに、砂丘地帯に南面し、高台と低地が入り込んだ、一見似た特徴を持つ。昭和になり、善行は昭和3,40年代の善行団地等の開発、大庭は昭和4,50年代の湘南ライフタウンの開発により、入り込んだ谷戸地形は薄れている。

3. 歴史に照らして、地名を見てみよう！

3.1 古代（武士の時代の前）

- 大庭、善行地区とも、縄文遺跡、弥生以後の土師器など、幅広い場所から遺跡が出土。主な遺跡としては、
 - ・ 高座丘陵南端 大庭**根下**遺跡（旧石器時代）、
大庭**築山**遺跡（縄文、弥生時代、奈良時代）
 - ・ 稻荷台地遺跡群 **石名坂**遺跡（弥生時代）、**池ノ辺**遺跡（古墳時代～平安期）
 - ・ 骨蔵器が出土した、善行 **乾塚**（奈良時代）
- 10世紀始め、『倭名類聚抄』に“大庭郷”の名がみられる。

※ 郷とは、律令制度下で認識されている地方行政単位。大宝律令で、国・郡・里の3段階の行政区画を編成していた。天平12年（740）頃、里が廃止され、郷制に移行。

3.2 中世（平安後期～室町・戦国期）武士の台頭

確認されている中世の歴史は、ほぼ大庭に関するもの。

この辺りには田畑の開墾が進み、ひいては荘園が造られ、武士の登場により、『吾妻鑑』等の史書にも**大庭**の名が登場する。

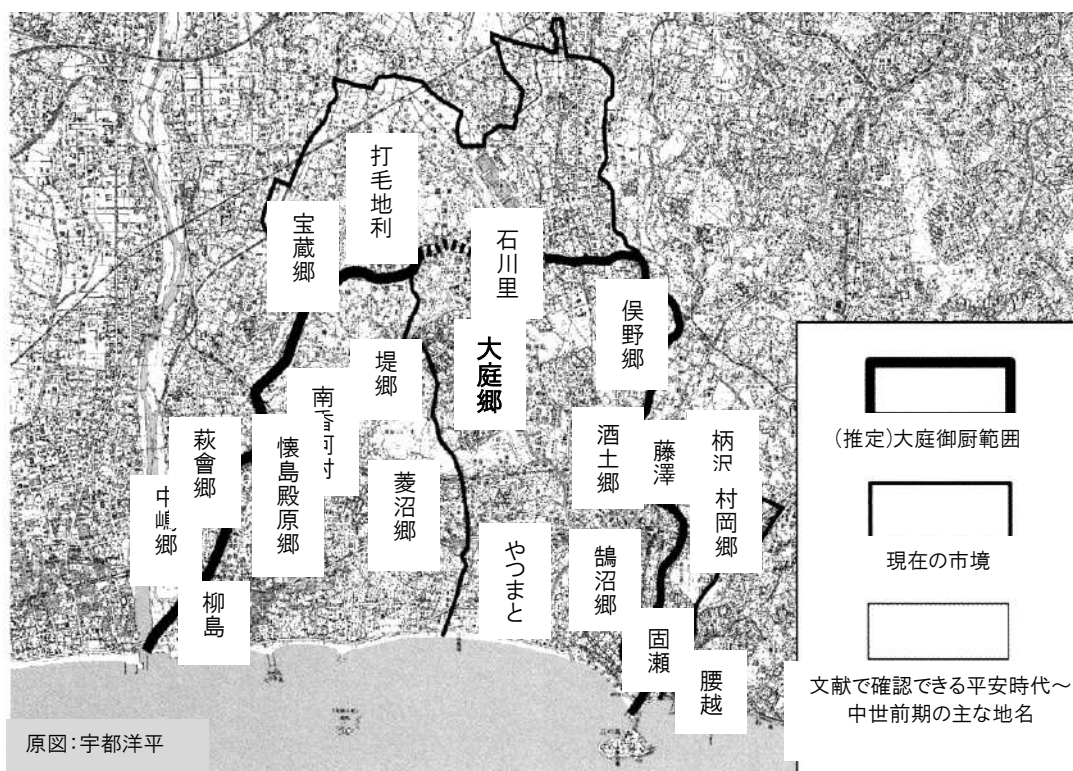


図 3-2 中世前期の地名と大庭御厨推定範囲（文字部分 加工）

転載：『歴史をひもとく藤沢の資料 5 善行地区・湘南大庭地区』 p38

(1) 「大庭御厨」という荘園

- 12世紀以後、大庭御厨となる。

※”御厨”とは伊勢神宮に神饌を貢進する所領

12世紀初め、鎌倉権五郎景正が大庭一帯の山野を荘園として開発。恒久的な免税を目論み、荘園は伊勢神宮に寄進を申請し、永久4年(1116)相模守に認められる。

大庭御厨の範囲(図3-2)

東：玉縄荘との間を流れる俣野川(境川)、 南：海

西：寒川神社領の神郷との堺(小出川)、 北：大牧埼(不明、亀井野?)

→ 善行も御厨内と考えられる

- 大庭御厨の支配者

鎌倉景正(景政)が開発、景正の子孫が継承し、大庭氏を名乗る。

大庭景親が源頼朝に敗れた後、大庭氏から領主は移り変わってゆく。

鎌倉御家人(三浦氏) → 北條得宗家 → 室町時代 鎌倉府の管領職の扇谷上杉家

☆この時代に関連しそうな地名(いずれも伝承)：

大庭館があったことに因む**隠里**、**城**(たて)、水田の関堀に因む**関下**

(2) 「大庭城」が使われた攻防戦

- 大庭城跡は、舌状台地の先端部に立地した天然の要害。築城時期は不明。

室町時代後期、この一帯を支配していた、扇谷上杉氏の築城と考えられる。

※ 扇谷上杉氏とは、室町時代 上杉氏の分家。

鎌倉府の管領職を世襲した家で、相模国に勢力を広げていた。

- 長享の乱の際、七沢要害(現 厚木市)を追われた上杉朝昌が、大庭城を拠点とした。

※長享の乱とは、上杉氏の内部分裂による戦。山内上杉 vs 扇谷上杉

- 永正9年(1512)、伊勢宗瑞(北条早雲)が関東制圧のために進軍、その際に落城した。

→その後、北條氏が大庭城を改修して使用したとの説もあるが、史実は不明。

☆この時代に関連しそうな地名：

城址公園付近**城山**、城山の北**駒寄・二番構**、東に**門先**、西に**裏門・城下**(しろした)

中世史に因んだ地名を探すと、すべて大庭地区。善行地区には、残念ながら中世史を反映した地名が見当たらない。ただし、中世の重要な街道「滝山街道」がこの地区を貫いていた。

3.3 近世（江戸時代）それぞれの地域に特徴がみえる

幕藩体制のもと、大庭・善行それぞれの地域の様子がわかってくる。

『新編相模国風土記稿』には、“大庭庄”として、大庭村から始まり、東は藤沢宿、西は柳島村(茅ヶ崎市)まで、36ヶ村が記されている。

※ 『新編相模国風土記稿』天保12年(1841)に作成された、幕府編纂の相模国の地誌。

(1) 大庭の江戸時代

大庭村は旗本領(六給)となる。集落ごとに領主が異なり、村中村のような集落の集合体に。小字の名称や、自治会の名前に、現在もその名残がみえる。

※ 一村が二人以上の旗本や大名家臣によって知行されることを“相給”といい、大庭村は、六家の地頭(すべて旗本)により分割されていたため六給。

- 大庭村内の六つの村中村（集落） （資料編「資料9：大庭地域の小字」参照）

※ 公的文書等には“～村”ではなく“～分”と書かれている。

折戸村：現城南地区辺り。大庭村の中の南部、旧東海道に沿った集落。

小字は、折戸・下ノ谷・南山・御伊勢宮・引地辺りと見られる。

→ 江戸後期には大庭村から分村し、折戸村一村で助郷等の役割を担う。

稻荷村：引地川東岸の旧東海道沿いから稲荷台地の上の集落。東側は藤沢宿に接する。

小字は、引地脇、中郷、池ノ辺、天神原辺りと見られる。

→ 17世紀中頃には大庭村から分村し、稲荷村一村で助郷等の役割を担う。

台村：現 台谷地区の高台部分と、宗賢院近くの城(たて)地区の一部にあった集落。

小字は、台・城下辺りと見られる。西側は赤羽根村(現 茅ヶ崎市)に接する。

→ 18世紀初頭に、引地川東岸に台村の農民が移り住んだ記録があり、

小字：持瀬・聖ヶ谷辺りも、台村に属したと見られる。

谷村：現 台谷地区と低地部分。舟地蔵公園から西南の低地部分にあった集落。

小字は、谷(やと)・有藤(うとう)。

→ 元は、台谷で同じ領主だったが、17世紀中頃に領主が分家して、

谷村が分家の領地となった。

入村：現北の谷地区と、表郷地区辺り。城山(大庭城)の東面にあった集落。

小字は、丸山・広地・門先・城山辺りと見られる。

小糸村：現小糸地区辺り。城山の西面、小糸川の周りにあった集落。西側は堤村(茅ヶ崎市)に接する。小字は、小糸・築山～羽根沢・駒寄辺りと見られる。

→ 入・小糸村は、江戸後期には大庭村の台・谷村とは分かれて助郷等の役割を担っていた模様。

ただし、これらの境界は明確ではなく、飛地や入会(村落の共用利用)地も点在する。大庭城のあった城山は、藤沢宿分であったことが、検地帳にも記されている。

幕末(慶応2年)に作成された大庭村絵図には、大まかな集落の位置とともに、入会地も明記されている。(図3-3)

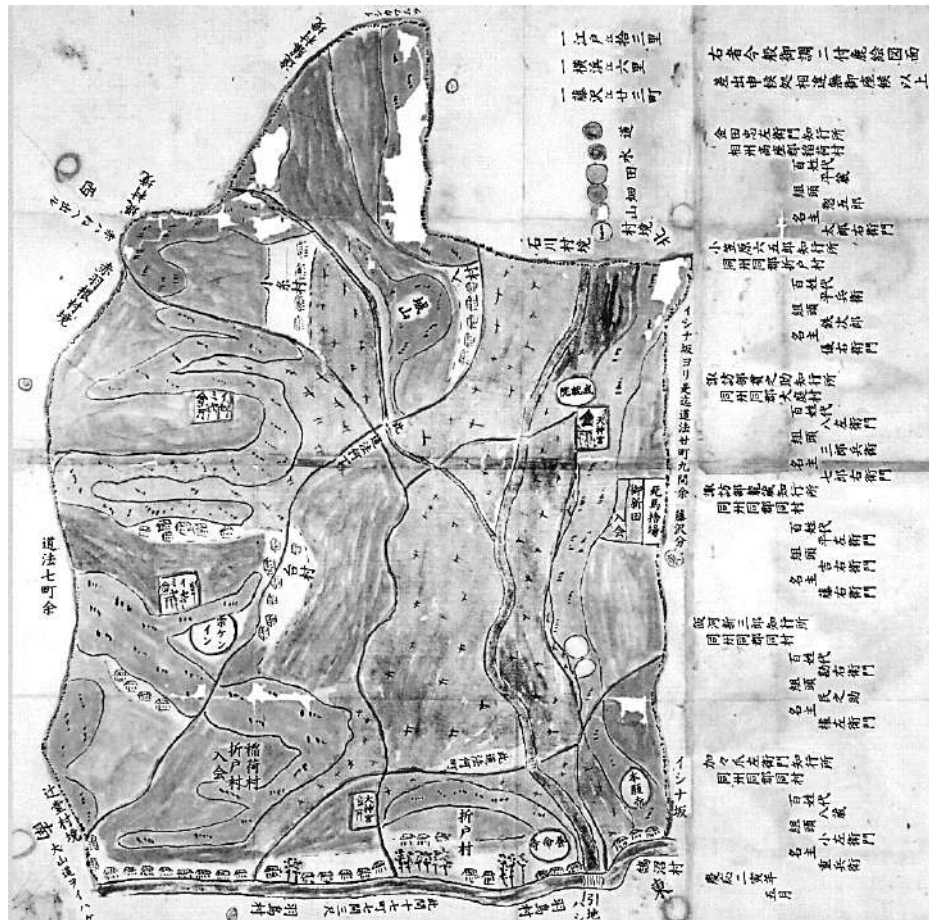


図3-3 大庭村絵図 慶応2(1866)年

※ 絵図に集落の場所、右端には領主名ごとに村役人の名が記されている。

(2) 善行・立石の江戸時代

転載：『歴史をひもとく藤沢の資料5 善行地区・湘南大庭地区』p10

現在の善行地区は、藤沢宿の枝郷であるため、天領(幕府直轄地)となる。

藤沢宿内の農村部であり、善行寺村、立石村、2つの小さな集落があった。

(図3-4、資料編「資料10：藤沢地域の小字」参照)

● 善行寺村

屋敷地が確認されているのは、善行神社近くの低地部(現 小字 善行)辺りに数軒。大半は畑地で、田圃は少なく、善行寺集落以外の周辺は、別の地名で呼ばれていた。

→ 地名：善行寺の由来は不明。

「善行寺」がこの地域にあったという伝承があるが、文献や遺物では未確認。

→ その他の地域は、地形や、土地の特徴 などを用いた地名が多い。

ex. 椎名谷、おっ越山、唐池 など

● 立石村

境川沿いの低地部、立石神社(山神宮)の近くに屋敷地が確認されている。

相模野台地の裾には、藤沢宿から西俣野へと続く道が立石集落を通っており、こちらが中世の滝山街道という説もある。

→地名：立石の由来。大山(伊勢原)より運んだという力石が地名の元といわれる。

● 台地をはしる「八王子道」

藤沢宿から、北へほぼ真っすぐに「八王子道」が、善行寺村と立石村の中間の台地の上を通る。八王子道は、相模国から武蔵国へつづく道で、内陸部との重要な輸送路であった。

→現 国道 467 号 立石 2 丁目交差点から亀井野歩道橋辺りの小字：庚申塚。

八王子道と円行道の分岐点があり「赤庚申」と呼ばれた祠があったことに因む。

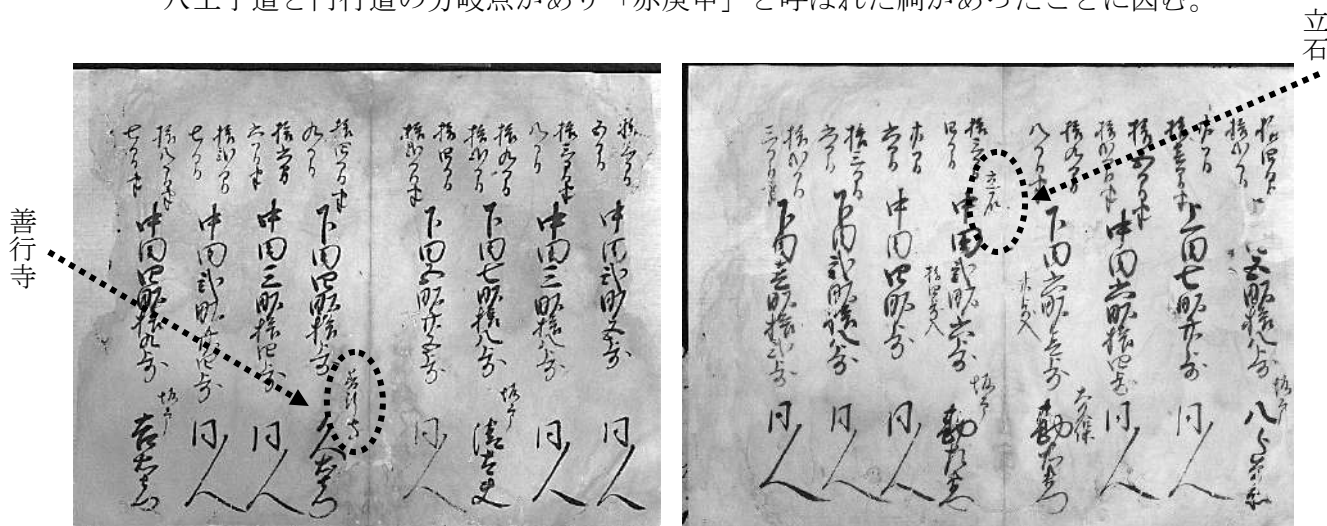


図 3-4 相州高座郡藤沢坂戸村 御縄打水帳 寛文 9 (1669) 年 [部分] (筆者撮影)

3.4 近代(明治以後)の発展 善行寺、立石の田畑、屋敷地も記されている。

● 明治期の緩やかな近代化

明治 22 年(1889)に市町村制が導入された初期は、大庭村の全域は明治村に、善行寺村・立石村は藤沢大坂町になる。

その後、明治 41 年(1908)他 2 村と合併して、藤沢町が成立。藤沢には鉄道駅ができ、急速に近代化するなか、大庭、善行の両地域は、静かな農村部の様子が保たれていた。

(資料編「資料 2：藤沢市域行政区画変遷表」参照)

● 昭和の激変

戦後、日本国中が高度経済成長期で大きく変貌するなかでも、大庭・善行の両地区には藤沢市の都市化計画により大規模な開発が行われる。その結果、現在両地域ともに、住民が激増して現在の姿となる。

・大庭地区

静かな農村部が昭和中期まで保たれていたが、昭和 40 年代の西部開発計画により、大規模な住宅地「湘南ライフタウン」に変貌。

→「農業と住宅の共存」掲げた開発により、農業保全地区を併せ持つ地域に。

・善行地区

昭和初期に地区南部にゴルフ場が開発される。戦時下で、軍より接収される。

戦後、昭和 30 年代の藤沢市域全体の都市計画により、北端の衛星都市として、文教・商業・住宅・工業地区を併せ持つ街へと変貌。

→ 一部地域の地名だった善行が、昭和 54 年に地区名として広く使われる。

4. まとめ

大庭と善行はともに、現在では大きな住宅地を抱える、藤沢市中央部の街。本来の地勢面や、現在の街の様子を捉えると、藤沢市内でも比較的類似する地区と見える。

- ・大庭地区は、高座丘陵の南端で砂丘地帯に面し、東部に引地川を有する。
- ・善行地区は、相模野台地の南端で砂丘地帯に面し、東端に境川を有する。

しかし、一見すると類似した特徴があるが、中世～近世の歴史は大きく異なり、現在残っている地名からもその傾向がうかがえる。

- ・大庭は、中世以前から古記録に登場し、歴史の出来事が連想される地名も多数。
- ・善行は、近代まで小さな集落の農村で、土地の様子などの地名が多い。

皆さんの住む場所の地名の由来を知り、それを手がかりに歴史をひもとくことで、郷土史がより身近なものになるかも！

＜引用参考文献＞

- 『藤沢市史 第1巻 資料編-考古編・金石文編・中世編・近世編』 1970年 藤沢市
『藤沢市史 第4巻 通史編-考古編・古代編・中世編』 1972年 藤沢市
『藤沢市史 第5巻 通史編-近世編』 1974年 藤沢市
『藤沢市地名調査報告書(Ⅱ)』 日本地名研究所 著 1985年 藤沢市
『藤沢の地名』 日本地名研究所 編 1990年(第2版) 藤沢市
『ふじさわの台地—人々の暮らしと自然—』 藤沢の自然 編集委員会 2002年
『歴史をひもとく藤沢の資料 5 善行地区・湘南大庭地区』 藤沢市文書館 2020年
『大庭御厨に生きる人々』 著：伊東一美 2015年
『藤沢市生涯学習大学 放送通信コース 中世大庭の魅力』
著：松吉大樹・宇都洋平・伊東一美 2021年
『角川日本地名大辞典』 27 大阪府 1983年、 33 岡山県 1989年